

Title	三、史學の國家主義的傾向について
Sub Title	
Author	田中, 荊三(Tanaka, Keizo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.153(481)- 158(486)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	海外史壇紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はポロスが西方で失つた勢力をば、熟達せる勇敢な君主に對する充分な敬意から、東部及び西部で充分に返へした。(原註、この點に關し G. Radet, Alexandre le Grand の意見をみよ)もし大王が、部下の軍の隨從を得てゐたら彼は宿敵ポロスが數年後サンドラコトス (Sandracottos 或ひは Tchan-dracopta) に奪はれることになつた大領土を征服することを助けてゐたであらう。

——右報告は一九三一——三三年のギリシヤ史界につき、(一)、考古學及び發掘 (二)、金石學 (三)、パピルス學 (四)、古泉學 (五)、一般史 (六)、特殊史 (七)、修史學 (八)、法律及び制度 (九)、經濟及び社會生活 (十)、宗教 (十一)、藝術 (十二)、文學 (十三)、地理 (十四)、雜の各項に分けて詳述してゐるがこゝでは右の(一)の一部及び(五)、(六)の一部を紹介したのみである。

三、史學の國家主義的傾向について

田中 荆 三

Beard と Vagts の兩氏が『米國史學評論』に史觀の變遷殊に史學に於ける國家主義的傾向を述べてゐることは、デモクラシーの國アメリカの雜誌に於てであるだけに殊に興味あることと思ふ。以下 Charles A. Beard and Alfred Vagts: Currents of thought in historiography (The American Historical Review, Vol. XLII No. 3.) の大まかな紹介である。

兩氏は先づ興味と思想の動きが歴史を凡ゆる研究の王座に進めたことをとき、次いで現在人類に遵奉を命じてゐる三大政治思想——デモクラシーとファシズムとコンミニュニズム——は、現前の事實としての行動性の歴史 (History as actuality) の説明に俟たねばならぬと云つてゐる。

そして長い間の歴史の諸相を取扱ふ歴史家が度々發生した政治や經濟の危機に無關心で象牙の塔に閉ぢこもつてゐることは出來ない。歴史家の書

齋の厚い壁の中にも所謂實際世界の騒音が入り込んで来る。それが爲に歴史家の思想は現實としての歴史及び修史自體の本質に關して生ずる内部の疑問のために深く悩まされてゐる。かくの如き實際世界の歴史家に及ぼせる影響の歴史は、古く且つ複雑であつてここには述べ切れないので、ただ史的概念の内部の分裂の問題のみを説明する、十九世紀から二十世紀へと世紀の變り目に歴史家に多くの影響を與へたドイツ人の所謂『歴史主義』(Historismus) について述べてゐる。

この歴史主義を採用する歴史家を二大別すると(一)自分が何をしてゐるかといふことは殆ど考へず、機械的に書物や教室での方法を追及してゐるものと(二)自分のやつてゐることを省察した後熟考して或る假定を採用してゐるものとである。後者のとれる假定は多年に亘れる主觀的客觀的の問題に關して明確なる立場をとり、すべての

大なる歴史的事件を一つの體系の中に完全に組織し得るものであるとの確信を持ち、連續的進化的思想を奉じ、歴史を記録せられ觀察し得るもの世界に限定するのである (Karl Heussi, Die Krisis des Historismus, 1932. S. 20)。この歴史主義に就いてはクローチエ (Benedetto Croce) が一九二一、三年に論じ、(後ちその著『修史、その理論と實際』に収録 (羽仁五郎氏の邦譯あり)) 世界大戰勃發後再び思想的なロマンチズムと物質的な實證論の對立の問題がとりあげられ、大にヨーロッパの歴史家の平靜を破つた。之等ドイツの歴史家は戦後の實情からして明に修史の技術の現實の歴史に對する關係を考慮しなければならなくなつた。その多くのものは彼等には快よきカイゼルの復歸を内心希望して、沈黙の中に隠れ家を見出し、他のもの、特に青年史家は新に生ける歴史と修史の關係について考慮を廻らしてゐた。實に獨逸は史觀の

本家であつただけに、全面的に古來の歴史の再検討が行はれた。アメリカの史學界には之等の影響が殆ど見られない。『米國の史家は歴史の哲學をもたない。少しも之を欲しない。これを信じない』のである。ヨーロッパに於ける思想上の動搖は三十四十年を経過した後アメリカに大きな反響を見出すのだから、一九一二年頃クロイチエを惱ました問題は一九五〇年頃にアメリカに勢力を得るであらうと。

次いで、歴史主義に關して最近の寄與として

歴史觀の變遷 (上段から下段へ)

自然法 (超時間的なる效力を有する) より
人類の合理的なる合意により國家を建設する契約説より

『人間はすべてのものを理解し得る』より
人類の理想に於ける最高なるもの、不變性、人性は到る處に於て本質的に同一性、歴史に於ける循環の可能性の信仰より
世界精神 (Weltgeist) より
人類の幸福より

海外史壇紹介

Friedrich Meinecke の Die Entstehung des Historismus, 1936 を舉げ、この書の中に Schaffesbury, Leibnitz, Gottfried, Arnold, Vico, Voltaire, Montaigne, Hume, Gibbon, Robertson, Ferguson, Purke, Lessing, Winckelmann, Herder, Goethe, Ranke 等の思想家が獨立のヴィヨを除き何れも關聯して歴史主義への發展段階をなす人々であることを述べ、次記の如き史觀の變遷の表を掲げ、個々の思想家に對するマイネッケの説を批判してゐるのである。

歴史主義 (たゞ一時的、局地的な效力を有する) へ
政治的權力、地理的位置及び人民の才能を國家の基礎と認むるものへ
『人間はすべてのものを理解し得ない』といふ (Vico) の説へ
時間空間が理想、個人主義、歴史的人物の個性、事業、事件を條件附けるものなることへ
民族精神 (Volksgeist) へ
民族の幸福へ

本來平等なる人類から

人間の理性は知能、主知主義、合理主義、實用主義等すべてを説明するに充分なりとすることより

歴史の對象及び運搬者としての人間性より

人類の世界としての世界より

權力政治を否定する個人の權利より

明確なる目的への進歩、即ち世界の進歩より

法律を奉ずる個人の如き國家より

歴史的事業の善惡を判決する自然の權利、戰爭責任問題より

中世を愚行の集團と考へた (Voltaire, Hume) ことより

理性の信仰より

歴史自體に於ける悲哀狂的な挿話より

正規な類型的な美より

更にマイネッケの分析せる右の表を注意して研究すれば彼自からの歴史家として各人は、過去が十九世紀の晩年に傳へた思想の型を見出すことが出来る。そしてもし彼に能力があれば前表の上段或は下段、若くは兩方から彼自身の異つた型式を選び出すことが出来る。然し歴史の類型はそれだけで完全なのではない。その類型を完全に近づけ

本來不平等なる人類へ

靈魂、直觀、不合理主義、視覺、プラトニズム、ネオプラトニズム、『反省することなくして反省を超越せる知識』(Burke)へ

歴史の對象及び運搬者としての國家へ

『諸國民の世界』(Vico)としての世界へ

權力政治を承認する國家の理由へ

『無限の進歩』(Leibnitz) 即ち『世界の廻轉』(Goethe)へ

法律を超越せる生體としての國家へ

倫理的判決の回避、戰爭無責任問題へ

騎士時代に對する大なる尊敬へ

運命の信仰へ

悲劇的性格を與へられたる挿話へ

個性美へ

るには、經濟學、生物學、特に Darwinism のやうなものを増補追加しなければならぬ。兩氏は次いで生物學的類推を批判し、社會はその本質は何であれ、植物學や生物學に説く有機體と正確に相應する機體ではないとし、Henry Adams の Letter to American Teachers of History (1900) の誤謬を指摘し更に Oswald Spengler の西洋の没落がこの

生物學的類推と周期的な物理學を混同してゐることを難じてゐる。

歴史學は自から求めし物理學、生物學的の類推を離脱して、現實の歴史に目覺め史家自身の主觀的な或は心理的な性質に復歸した。一體現實としての歴史現象の本質は何であるかとの間に對し未だ満足すべき回答が與へられてゐない。然しRiezlerが歴史をば是迄時間の中に進展したる思想と興味であると解したのは眞理に近いやうに思はれる。思想家の心の中で思想は内的の檢討により、又心理的物質的な興味の影響のために變化する。心理的物質的な興味は共に思想の影響のために變化する。以上は時間の中に起りそして現實としての歴史である、と云ふのである。

更に、以上の如き、史學の種々の問題が起つてゐるが歴史主義の方法は放棄せられず、反つて經驗と聯想の事實に對する尊敬が深められてゐる。

そして昔から云はれてゐる如く『文書のない歴史はない』と云ふのは今でも眞實である。知識はなほ書籍の解題、嚴密なる調査考證の方法によつて得らるべきである。然し歴史的興味の範圍は廣められた。歴史はも早や軍事、政治、外交に限られず文化的經濟的な事實についてその起原、性質、意味を明かにせんとする重大なる努力が拂はれてゐる。歴史的興味の範圍はその主題の全體に、行動としての歴史に擴げられた。最後に歴史は個人に多く貢獻をなす如く、國家の政策に寄與せねばならぬことを自覺して來た。國家の政策に對して歴史は資料を提供しなければならぬ。若し資料が乏しく不正確で且つ偏頗な出鱈目なものであるならば、歴史は國家の政策に對して有害であり、資料が豊富で正確で包括的で且つ系統的であるならば愈々以て有利である。歴史家はそれを否定して分析的な言語學の塵埃の中に隠れ家を求めた時で

あつても、公の責任がある、歴史家は實際に役立つものでなくてはならぬことを要望して本論は結ばれてゐるのである。